
ガンダムSEED 交わった世界

カルラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダムSEED 交わった世界

【Nコード】

N7696Y

【作者名】

カルラ

【あらすじ】

C・E・71 L3コロニー「ヘリオポリス」にて地球軍による新たなプロジェクト、その名も「G」計画。新型MS・5機と新型戦艦を開発されていた。だが、ある組織にこの情報は漏れていた。コーディネイターとナチュラル、2つの人類。悲しい歴史は終わりを告げない。

今此処に新たな物語、少年達をも巻き込む戦争が始まるつもり。

この作品はガンダムW×ガンダムSEEDのクロス小説です。

なお、ガンダムのパイロット五人組は16歳設定です。

プロローグ（前書き）

物語の序章です。

初めてですが、頑張ります（〇< >〇）

プロローグ

ある一機のシャトルの中

?? 「なあ、本当にあの情報はあってるんだろっな？」

×× 「……」

?? 「無視するな!!」

長いおさげ髪を揺らしながら黒い服を着た少年が言う。

×× 「…、うるさい。聞こえている…」

凍てつく瞳の少年が反論する。

?? 「本当に、L3コロニーでMS開発が行われているのかよ？」

×× 「ああ、間違いない。この小火は早急に消し去るぞ、デュオ」

?? 「分かってる、ヒイロ」

デュオ 「あの悲しい歴史は繰り返したくねえもんなあ…」

プロローグ(後書き)

さて、今後どうなるやら…

キャラクター設定

↳ガンダムW↳

12/18追加(前書き)

ガンダムWメンバーの設定ですっ!!

キャラクター設定

↳ガンダムW↳

12 / 18追加

ヒロ・ユイ

年齢：16歳

所属：ブリベントー『エンジェル』

搭乗機体：ウイングガンダムゼロカスタム

元ガンダムパイロットのひとり。無口で無愛想と思われるがちだが優しい心の持ち主。リリーナを守る事が彼の最優先任務らしい。デュオ曰く「ぞっこん」

デュオ・マックスウエル

年齢：16歳

所属：ブリベントー『デス』

搭乗機体：ガンダムデスサイズヘルカスタム

ヒロと同じく元ガンダムパイロット。自ら死神と名乗る陽気な少年。長いブラウンの三つ編みとコバルトブルーの瞳がトレードマーク。ヒロとコンビで任務をする事が多いことがこの頃の悩みの種。

トロワ・バートン

年齢：16歳

所属：ブリベントラー『ピエロ』

搭乗機体：ガンダムヘビーアームズ改

ヒイロと同じく元ガンダムパイロット。顔の半分を覆っている長い
ブラウンの髪が特徴的である。普段はサーカス団のピエロをやっ
ている。

張 五飛

年齢：16歳

所属：ブリベントラー『ナタク』

搭乗機体：アルトロンガンダム

元ガンダムパイロットのひとりで『マリーメイアの反乱』時はヒイ
ロらの敵となり立ちはだかった、漆黒の髪と瞳を持つ中国人。

EW版が終わった直後の設定。

(にもかかわらず、ガンダムは自爆していない)

カトル辺りが『宇宙の心が~~~~』等と言って自爆を反対したと
いうことになってください。

他のメンバーは登場後に載せます

キャラクター設定 〈ガンダムW〉 12/18追加(後書き)

マリーメリアの反乱 [12月27日]

『ヘリオポリス』奇襲 [1月25日]

いわゆる『ス ボ』みたいな世界観です…(笑)

第1話 平和な時間（前書き）

ついに主人公の1人登場っ!!

第1話 平和な時間

「3コロニー」ヘリオポリス」内

まだ、幼さの残る茶髪の日本人系の少年の肩に小型ペットロボットが舞い降りる。

「トリー」

少年 キラ・ヤマトは「トリー」をくれた少年を思い出す。

「アスラン……」

緑色の瞳、年齢よりも大人びた口調。

キラもそのうちプラントに来るんだろ？

「おい、キラ」

少年の声が聞こえる。

キラはその少年の名前を呼ぶ。

「トール、それにミリイも……」

トール・ケーニヒとその恋人ミリアリア・ハウ。同じゼミの仲間だ。

「どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃねえよ！！カトウ教授がお前を探してたぞ」

「きつと追加の課題ね」

ミリアリアがウィンクしながら言った。

「うええ〜 まだ、渡された課題、終わってないのに…… あの鬼教授」

「楽しい会話中だけどちよつといいかい？」

「……えっ!?!?」「」

聞いたことのない声だった。

そちらを向くと、少年が2人。

1人は長いおさげ髪に黒い服を着ている。そしてもう1人は凍てつく瞳に緑色のタンクトップとジーパンを着ていた。黒い服の少年が言う。

「お前ら、ここのゼミの学生か？」

「そうですね…。」

「ふーん、じゃあカトウ教授がどこに居るか知ってるか？」

これも黒い服の少年だ。

もう1人の少年は静かに会話を聞いている。

「教授なら、『モルゲンレーテ』の方に居ると思いますけど…、何か用ですか？」

「いや、ありがとな！」

そこで彼らは踵を返し歩き出した。

「何者だ？あいつら…、見たことない顔だけど」

「ほかのコロニーの学生かしら？」

「やっぱり、黒だったな、このコロニー」

「ああ、念のためモルゲンレーテの方も調べておくぞ…。」

「OK」

第2話 偽りの平和（前書き）

少々、長くなりました……

第2話 偽りの平和

ゼミの一室

ガチャツ (ドアを開ける音)

「あつ、やっと来た…」

「全く、今まで何してたんだ？」

前者はカズイ・バスカーク。後者はサイ・アーガイル。
2人とモートルと同じゼミの仲間だ。

「ごめん、遅れた…」

「あれ？教授は？」

「なんか用事が出来たからどっか行つた。それと、はい」
カズイが何かを差し出す。
それは

「はあー、まだ終わってないのに、追加が…」

「頑張れ、キラ」

トールが肩をたたく。

ふと視線を感じそちらを向くと、少年が居た。

「彼は？」

「ああ、教授のお客さん」

「教授の？……、あつ、そういえばこっちに少年が2人来なかつたか？」

「え？………来てないけど」

トールの質問にサイが答え、カズイも首をふる。

「まじ？じゃああいつら、何だったんだ？」

その瞬間

ダフオオオオンッ

「なっ、何だ!?!」

「爆発!?!」

「隕石かつ!?!」

その時、ゼミの大人が言った。

「ザフトに攻撃されている」

「コロニーにモビルスーツ(MS)が入って来てるんだよ!!」

それを聞いた瞬間、教授のお客さんである少年が急に動き出した。

「あつ、君」

少年は銃声の聞こえる方向に向かって行く。

あわてて、彼の腕を掴む。

細い腕だった。

「っ！！離せッ！！」

「何言ってるの？それよりも早く避難しないとっ」

急に爆風が吹いた

それにより帽子が飛ぶ。

「お……………おんなの……………子？」

「何だと思っていたんだ？今まで…」

少年　いや、少女が言った。

「いや……………その……………」

「お前は早く避難しろ！！」

「えっ……………、君は？」

「私には確めなければならぬことがある」

そう言うときまた銃声の聞こえる方に向かおうとする。

後ろを向くと、来た道は瓦礫で戻ることなどできない。

「そんなことよりも避難しないとっ！！」

「あっ！！お…おいつ！！」

僕は彼女の腕を引き、シエルターを探す。

急にか細い声が後ろから聞こえた。

「こんなことになってはと、私は、私は……………」

暗い通路の先に光が見えた。

僕はそれを目指して走る。

光が眩しくて立ち止まった瞬間っ

ダダダダダダダッ

そこは、戦場だった。

銃声と銃声が響きあい、次第に音が大きくなる。
聴覚がおかしくなるぐらいに……………

すると、彼女は何かを見つけその場に座り込む。

「地球軍の新型機動兵器……………、お父様の……………」

此処に居たら、撃たれる。

僕はとっさに思った。

早く此処から離れないと。

「泣いてちゃダメだよっ！！ほら、走って！！」

僕たちは再び走る。

角を曲がると、シエルターが見えた。

「ほら、此処に避難してる人がいるよ」

よっぼど、さっきのことが衝撃的だったのだろう…

さつきからずっと黙ってる。

スピーカーから声がする。

「まだ、誰か居るのか！？」

「はい！僕と友達もお願ひします！！開けてください」

「2人！？もう此処は一杯なんだっ！！」

左ブロックに37シエルターがあるがそこまで行けんか！？」

そちらの方を見る限り、簡単には行けそうもない…

「なら1人だけでもっ！！お願ひします！！女の子なんです！！」

「わかった…、すまん」

同時にドアが開く。

「入って……………」

だが、彼女は無言だ。

僕は無理やり彼女を押し込む。

「何を！？私はッ」

「いいから入れ！僕は向こうに行く。大丈夫だから！早く入って！

！」

「待てッ！！お前ッ」

そのままドアを閉め、走り出す。

さっきの銃を向けた女性がまだそこにいた。
そして、その女性を狙う一つの銃口

「危ないッ!!後ろ!!」

「……」

ダキユンッ

女性はとっさに自分を狙っていたザフト兵を撃つ。

「……………さっきの子？なんで!？」
女性が叫ぶ。

「来いッ!！」

「左ブロックのシエルターに行きます。お構い無く」
だが、彼女の言葉は衝撃的だった。

「あそこはもうドアしかないッ!!」

「えっ……………」

「こっちへッ!!」

僕は意志を決め、2階から1階に飛び降りた。

ダダダダダダダダッ

「っあ!!」

「ラストイッ!!くっ!!」

ダキユンッダキユンッ!!

「うぐっ……」

「ハナマツ!!」

仲間が撃たれたのだろう、彼女が赤のザフトパイロットに射撃する。
ザフト兵も撃ち返す。

「ああッ」

女性は被弾した。

ザフト兵の銃は弾詰まりしたのだろう。

銃を捨て、ナイフを持ち変えた。
僕はとっさに彼女の前に出る。

ザフト兵のバイザー越しに相手の顔が見えた……

「アス……、ラン？」

「キ……キラ……キラ！？」

第2話 偽りの平和（後書き）

誤字、脱字やアドバイス等お待ちしています!!

第3話 天使と死神（前書き）

ちょっとオリジナルを加えてみました

第3話 天使と死神

同時刻

『ヘリオポリス』モルゲンレーテ付近

「ザフトのMSだっ!?!?」

「『ここ』は中立の筈だぞ!?!?」

避難する人々の波に逆らう人影が2つ……。

「おい、ヒイロ。相棒たちを連れて来て、正解だったな……」

「ああ……」

「にしても、『ザフト』さんも派手なやり方するなあ」

「無駄口をたたく隙があるなら足を動かせ……」

「へいへい……」
彼らが向かう先、そこは

「もう一度一緒に暴れようぜ、相棒」
「……………」

工場の中でひっそりと立っている鋼鉄の巨人
ガンドムが彼らを待っていた。

手慣れた手つきで起動させる

「どうする？ヒイロ。敵を全滅させるか？」

「いや、武装解除させる……」

「りょーかいッ！！さうて、死神が戦場に舞い戻って来たぜえ！！」

「敵MSは……………3つて、結構少ないなあ」

「おそらく、別部隊がいるんだろう……………」

「つてことは、あいつらも『アレ』が狙いか……」

こちらの存在に気付いたのだろう、敵MS　ジン三機がこちらを向く。

バーニアを吹かし、突進してくる。

ヒロが乗るウイングガンダムゼロは、素早く舞い上がる。

デュオが乗るガンダムデスサイズヘルカスタムは、ハイパージャマ―を起動させる。二機の突如な動きにジン三機は立ち止まる。その内の一機に忍び寄る、不穏な影……………

死神　ガンダムデスサイズヘルカスタムが大鎌

いや、ビームシザーを振り下ろしジンの頭部と右腕を引きちぎる。

「いつ……………いつの間に!？」

「チツ!お前は一端離脱しろ!！」

「クツ!すまない……………」

しかし、一羽の天使が別の機目掛けて急降下する。

そして、そのままビームサーベルで両足を分離させる。

その姿はまさに『告別天使』であった。

「はっ……………速い!？」

「ナチュラルごときが……………、離脱するっ」

その時

ダフオオオオオンッ

「ッ……………!?!」
「なっ、なんだ!?!あ……………あれは!?!」

彼らが見たもの、それは

「奪取されたか……………」
「しくったぜッ……………」

額にV字アンテナを持つ鋼鉄の巨人
起動していた。

ガンダムが三機、

「流石ザフト、お手が早い……………、情報を当てにすると、後二機残
っているはずだっけ？」

「ああ……………」

三機はこちらに目もくれずコロニーから脱出していく。

が、次の瞬間、残りの二機も立ち上がる。

だが、片方の機体の動きはぎこちない……………

「……………、まさかあの機体」

最後の二機のジンがぎこちない動きの機体に攻めこむ。

仲間から知らされたのだろう……………

乗っているパイロットが

ナチュラルであると……

機体のパイロットも己の危機に気付いたのだろう、向きを変えた瞬間
灰色だった機体に鮮やかな色が浮き出る。

「あれが例の『フェイズシフト』ね……」

赤い機体は離脱する。

白い機体は必死に防御する。

だが強度の高い機体でも、同じ場所を攻められては、長くは持つまい……

ジンがこれで決めると動きを止めた瞬間、機体
ガンダムが

さっきまでとは別人の動きでジンに体当たりする。
バルカンを用いて敵との距離を作る。

「まさか、あのパイロット、調整してるのか!？」

おそろしく、そのまさかだろっつ……………

「ありえねえ……………」

「確かにナチュラルでは無理だろうな……………」

「つてことは、ヒイロ」

「ああ」

ガンダムはナイフのような武器を取り出し、ジンのコックピット付近に攻撃する。

ジンのパイロットは機体を捨てて、脱出した。

「あの機体どうする？ヒイロ」

「……………、あのパイロットに接触する」

「そうになくちやな！！」

第3話 天使と死神（後書き）

感想お待ちしています！

第4話 GANDAM(前書き)

オリジナルを少し入れるだけでも難しいです…(´・`・´)

第4話 G A N D A M

「はあはあ……………」

緊張の糸が途切れたのか、少年はシートに身体を預ける。

そして、先ほどのザフトパイロットを思い出す。

（あの顔……………、確かにアスランだった。でも、なんでアスランが『ザフト』にいるんだ？戦争は嫌いだって言ってたのに…）

そう思いながら、少年 キラ・ヤマトは後ろで気絶している女性を見る。

戦場に居たキラをこの巨人の中に連れ込んだ（押し込んだの方が正しいかもしれない…）人だ。

モニターでこの機体の足元を見る。

そこにはゼミの仲間達が居た。

機体の膝を折り、コックピットから顔出す。

「キ……………、キラ！？何でそんな所にいるんだよ?!」

「トール、サイ、この中に気絶している人がいるんだ。怪我もして僕一人じゃ降りることも出来なくて…」

「わかった、とりあえずもう少し下げてくれっ」

「あ…、うん」

サイが女性を見ながら聞いてくる。

「なんであんなものに乗っていたんだ？」

「あの子を追っていたら戦闘に巻き込まれて、あの女性に乗せられたんだ……」

そこにトールが疑問を投げかける。

「でもなんで中立の『ヘリオポリス』でMSが造られてんだ？」

「その疑問、答えを教えてやるつか？」

何処かで聞いた覚えのある声だった。

その場に居た全員が声のする方を見る。

サイとカズイにとって見たことがない人物だが、キラとトール、そしてミリアリアにはまだ記憶に新しい人物だった。

「君は……………あの時の」

長い髪に黒い服を着た人物。

カトウ教授の居場所を聞いてきたあの少年だった。もちろん、凍てつく瞳の少年もいる。

「よう！また会ったな、兄ちゃんたち」

「君は、……………一体誰なの？」

「俺？俺は……………、……………ヒロ！ヒロ・ユイ、ちょっと物知りのジャンク屋さ！！んで、こっちの目付きの悪い奴は知り合いの」

「……………デュオ・マックスウエルだ」

凍てつく瞳の少年が言う。

黒い服の少年　　ヒロが問う。

「お前の名前は？」

「…キラ、キラ・ヤマト」

「ふゝん、お前あのMSに乗って戦ってたろ？」

キラはヒイロを探るような目で逆に問い返す。

「もし、違ってたら？」

だが、ヒイロは不敵な笑いを浮かべながら言った。

「お前さあ……………」

「コーディネイターだろ？」

その言葉にその場の空気が凍った…
キラは信じられなかった。

「な、なんで……………?」

「悪いが、さっきの戦闘をみさせてもらった。

初めて乗ったMSでの戦闘、OSを戦闘中に調整、そしてザフトを
見事に返り討ちした。」

3本の指を立てながら、ヒイロは言う。

「どれも、ただのナチュラルには無理だからな…」ヒイロの言葉に
続き凍てつく瞳の少年　デュオが

「安心しろ、別にお前を捕まえるわけではない…」

「そうそう、ただ知りたかっただけさ!!」

「……………」

どうやら、気を失っていた女性が目を覚ましたようだ。
ミリアリアがゆっくりと問う。

「大丈夫ですか？」

「ええ、……………ッ！あの機体はッ！？」

女性はキラを見つけると、尋ねる。

「あの機体は……………？」

「あそこに……………」

キラは指をさし、ある場所を教える。

「良かった……………」

「最後の一体まで無くなっちまったらやべえもんなあ？」

ッ！？何故その事を！！」

女性の言葉を遮ったのは、黒い服を着た人物

ヒロ口だった。

「さあ〜ね？名前を名乗らない奴に答える気はさらさらないね！」

「……………、マリュー・ラミアスよ」

「『地球軍の』だろ？」

女性

いや、マリューはヒロ口を睨む。

「あなたたち、一体どこまで知ってるの！？」

「答える義務はないね！」
するとマリユーは懐から

チャツ!!

「おいおい、ガキに向かつて拳銃を向けるなよ…」

「戦争をしているのよ、大人も子供も関係ないわ!!」

だが、ヒイロは拳銃を向けられても、驚きもしない。

そこにトールが割り込む。

「待ってくれよ!」『ヘリオポリス』は中立。戦争には関係無いだろ
ッ!!」

パンツ！！

マリューが持つ拳銃からは煙が立ち上る。

だが、銃口は上を向いている。

それでも、戦争とは無関係に育ってきたキラたちは言葉を失う。

「黙りなさいッ！！なにも知らない子供が！！」『中立』だ、無関係だ、そんなことを言っていれば、まだ無関係でいられると思っっているの！？」

視界の端でデュオが動いた気がした

ダッキュンンンッ

「っー!!……………」

マリユーが持つ拳銃をデュオが隠し持っていた拳銃で撃ち落としたのだった。

「何故驚く？お前は言った筈だ。『戦争をしている』と、『大人も子供も関係無い』と」

凍てつく瞳のまま続ける。

「ならば、子供が銃をもっているも、大差ない」
そこにヒロが割り込む。

「さてと、このまま此処に居ると、コロニーと運命を共にしちまう。
何処か安全な場所は無いのかよ、地球軍さん？」

マリユーはキラの方を向き、

「あなた……………、名前は？」

「キラ・ヤマトです」

「そう、じゃあキラ君、あの機体に乗って通信してほしいの……」

「何処にですか……?」
「それは…」

ビーッ、ビーッ、ビーッ、ビーッ、ビーッ、

なにつ!?!」

何処かで警告音が鳴った。

しかし、その音は何を知らせているのか、キラたちには、わからなかった。

「行くぞ……」

「OK!!きつちりと相手してやるうじゃねえか!!」

デュオとヒイロが謎の言葉を残し、踵を返す。

「何処に行くの?」

キラが問う。

「MSに初めて乗った奴は此処で観てな!!ベテランの戦いを観してやるよ」

ヒイロはそう言いながら、何かのスイッチを押す。

すると、何も無かった空間に鋼鉄の巨人が2体、現れた。

「ガン、ダ…ム?」

それは先程、キラが乗っていた機体

ガンダムに酷似し

ていた。

第4話 GANDAM(後書き)

現在の状況

ヒイロ デュオ
デュオ ヒイロ

と、名乗っています。

50pt突破!! (前書き)

作者から読者への感謝の気持ちです

50pt突破!!

キラ(あれ?此処どこ!?)

ヒイロ).....

キラ(ヒイロいたの!?) ; . . (

デュオ(俺、参上ッ!!)

キラ(えっ?えっ!?) ;!!

ヒイロ(うるさいぞ、デュオ

デュオ)ったく、いいだろう少しぐらい浮かれたりしても...

ヒイロ)一番浮かれているのは、あの馬鹿だな...

カルラ(50pt突破!

お母さん、産んでくれてありがとうとぉー!!!!

キラ(そんなに嬉しいの?)

カルラ(もちろん、まさか私の駄作を気に入る人なんて居ないと思
つてたからね

デュオ(なら、何で載せたんだ?

カルラ)ノリッ!!

ヒイロ)死ね

カルラ() 一一一一!!

いいもん...、今すぐヒー君にネコミミ& amp ;し
っぽ+執事服を着せて『おかえりなさいませ、お嬢様』みたいな
感じのイラスト書いてやるんだから...

ヒイロ)なっ!?

キラ(ね...、ネコミミ...?)

デュオ(執事服う!?)

カルラ)準備、準備

ヒロ)アカシック…

カルラ)ん(ー・) ?

ヒロ?)バスタアアアアアアアッ

!!

カルラ)えええええええええええええええええええええええッ!!(; 。 。)

キラントッ!!

キラ)作者、 になったけど…(汗)
デュオ)気にすんな!!そのうち帰って来るぞッ!!

キラ（そういつものなの？

ヒロ（全く、あの駄作者は……………、ブツブツッ

キラ（……………さっきのヒロ、見事にキャラ崩壊してた気がする……………

デュオ（はあ？中の人だろ…

キラ（えっと、作者からの伝言です。

「へたくそですが、一生懸命頑張りますので今後もよろしくお願いします」

カルラ（復活）お気に入り登録してくださり、本当にありがとうございます
ざいます

次回からも見てくださいますと光栄です。

50pt突破!! (後書き)

ン) 俺の出番は?

カルラ) さあ?

ン) あんたって、

人はアアアアアッ

(血涙)

くおまけく

キラ) あれ? あの話は?

カルラ) 『あれ』は「彼」が出てきてからね

第5話 巻き込まれた少年（前書き）

戦闘シーンは書くのが難しいです。

第5話 巻き込まれた少年

「そんな、ありえないわ……」

女性 マリユー・ラミアスは目の前の2機の巨人の存在を受け入れることが出来なかった。

今回のプロジェクト、『G』計画で開発されたMSは全部で5機のはず……

間違いない、自分もこの計画に参加したのだから……では何故 ?

キラは何もない空間から現れた2機を見ていた。

1機は、白い4枚の翼を持っている。

その姿から連想されるもの
ようだった。

そう、神々しい天使の

もう1機は、

黒いボディ、コウモリのような黒い翼、まるで

「あく……ま」

その言葉を呟くだけで寒気がする。

黒い機体には、黒い服の少年……ヒロが、白い機体には、凍てつく
瞳の少年……デュオが、それぞれ乗り込む。

巨人たちが目をさましザフトのMS『ジン』に立ち向かっていく。

11対2

そのうちの1機はジンとは少し違う武装。

圧倒的にヒロたちの不利なのがわかる。
負ける

僕はそう思った、いや確信した。

ザフト兵は、遺伝子を調整した者たち、『コーディネイター』で構
成されている。

無論、訓練も受けているのだろう。

そんな彼らに勝てるわけがない、と思ったからだ。

だが、

「ウソだろ……、相手はあの『ザフト』だぞ……」
サイの呟きが聞こえた。

信じられなかった。

相手はあの『ザフト』。

にもかかわらず、彼らは巧みな技術でジンの頭、腕、脚をもぎ取っていく。

女性 マリユーの呟きが聞こえた。

「いったい、彼らは何者なの……………?」

「まったく、『欲張り』はよくねえなあ」
通信を開きながら、デュオが言う。

「……………、もう少し静かにやれ」
待ってました、と言わんばかりにデュオが返答する。

「おいおい、俺はお前みたいに黙ってやる主義じゃねえんだよ!!」

「……………」
「お……………い、『エンジェル』？」

「……………」
「あー、こちら『デス』、『エンジェル』ど
うぞ？」

「……………」
「……………」
「無視すんなアーツ!!」

ビームシザーを振り回しながら、通信機に怒鳴る。

器用なことにジンの頭や手足を奪い取っていく。

そして、

その光景を上空から眺めるジンとは異なる1機のMS、『シグー』。

その中にいるパイロットは、金色の髪に怪しげな仮面を付けている。
「ほう、『死神』に『告別天使』か……。どうやら、あの情報が火消
しの『ブリベント』にも入っていたとはな……。

ん？」

モニターに映る怪しげな動き。

灰色のMSにトレーラーが停まっている。

「あれが奪い損ねた最後の1機か……。

ッ……………!!!!?」

急に身体 いや、細胞が何かの存在を感じる。

「ほう、貴様も来ていたか？」

宿敵とも言ってもいい相手

「ムウ・ラ・フラガ…」

「ラウ・ル・クルーゼッ！！」

ビーン、ビーン、ビーン、ビーン

「……………ッ!」

「ああ?!まだいんのかよ!?!」

サブモニターに映っているのは1機のモビルアーマーMA。

「ありや、地球軍の…『メビウス』のカスタム機か…!?!」
オレンジ色にカラーリングさせた機体がシグーに攻撃を仕掛ける。
だが、シグーはひらりと避け銃を撃つ。

その先には

「ッ！！…潰す気か？」

「くそッ！間に合わねえ！！」

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「本当に、このトレーラーでいいんですか？」

サイの問いにマリユールはうなずく。

「ええ、間違いないわ。それじゃあ、指示した通りにストライカーパックに取り換えて」

トールが不思議そうな顔で

「『パワーパック』ってあのランチャーみたいなやつじゃないですよね？」 「パワーパックは元々ランチャーの中にあるわ。あの機体がランチャーを持つことでバッテリーを取り換えできるの」
そこまで説明すると僕の方を向き、

「やってくれるかしら？」

「……………、わかりました。此処から脱出できるのなら…………」

僕は機体に取り込み、OSを操作する。

そして、通信回線を開きながら、

「こちら、『X105ストライク』 地球軍 応答願います！」

地球軍 応答願います！！」

しかし、返答はない……

再びOSを操作し機体に武器を装備させようとした時

ビーッ、ビーッ、ビーッ、ビーッ

「えっ…?!」

モニターを見ると遙か上空でザフト軍のMSと地球軍のMAが交戦していた。

MSが発砲し、こちらに向かってくる。

「なっ!? 冗談じゃないッ!!」

僕は急いで武器を装備させてフェイズシフトの電源をつける。すると、灰色から白、青といったカラーリングが変わる。

その瞬間

ダッフォオオオオンッ！！

別の場所で爆発が起こる。

その爆煙から出てきたのは

白亜の戦艦だった……

第5話 巻き込まれた少年（後書き）

感想、お待ちしております。

第6話 アークエンジェル

爆発と共に現れた白亜の戦艦…

ふと、マリユーの呟きが通信機から聞こえた。

「アークエンジェル、来てくれたの？」

その呟きから、あれを地球軍が造ったのだと理解する。

(地球軍はMSだけじゃなくあんな物まで造っていた…)

そう考えると背筋がゾツとした。

白亜の戦艦はザフト軍のMS『シグー』に攻撃する。
だが、シグーはその攻撃さえもかわす。
戦艦が放った実弾はそのままコロニーの地面を、建物を、外壁をえぐる。

「ッー!!……………」 『ヘリオポリス』が……………」

「……………あれか、」

「みたいだな…、ようやく逢えたなあ」『大天使』さんよお」
デュオの口元が弧を描く。

「どうするよお、キラの援護でもするか？」

「いや、様子を見る……………」

「そうですかい、いざとなったら俺だけでも行くからな」

「好きにしろ……」

通信機の向こうからデュオの文句が聞こえる。

俺たちがシグーと戦っても意味がない。

機動力、技術力、操縦力において差が開き過ぎている。

それにキラが乗る機体が装備するあのランチャー、何かある……………

シグーは此方に銃口を向け撃つ。

ダキユンッ、ダキユンッ

それにより、コロニー崩壊が進行する。

「ちよっ……、冗談じゃないッ!!」

僕は機体に装備させたランチャーを構える。
スコープを覗き、シグーをロックする。

「待って！それは………」

マリユーの声が聞こえた気がした。

だが、迷わずにスイッチを押す。

途端に、まばゆい閃光が駆け巡る。

それはシグーの片腕では物足りず、コロニー外壁をも呑み込む。
「ああっ……………」

シグーは戦闘続行不可能と判断したのか、離脱する。
ほかのジンは既に瓦礫の山となっていた。
不意に通信が入る。

「そのMS、応答しろっ！」

聞いたことのない男の声だ。発信源はオレンジ色のMAからだった。
「この声……………」、『ゼクス』なぜ貴様がここにいる！？火星の任務
はどうしたッ！！」

男の声を聞き、デュオが声を荒げる。

だが、男は

「ちょっと待て、俺は地球軍第7軌道艦隊所属『ムウ・ラ・フラガ』
大尉だっ！！』『ゼクス』じゃねえ！」

「そうか……………、それは失礼した」

ザフト艦

『ヴェサリウス』艦内

「おっ！4機目がきたか……」

ジンとは系統が違う真紅の機体が着艦する。

それを操縦しているのはエリートを示す赤のパイロットスーツで身を包む少年だ。バイザー越しに見える瞳は緑色、蒼い髪が特徴的だ。彼の脳裏には先程の少年の顔が過る。

自分の名前を呼んだ彼が

（何故、キラが『ヘリオポリス』に……………？）

OSを操作しながら彼 アスラン・ザラは思う。

幼い頃から共に育った、その彼がここに居る筈が無い。だが、

「外装チェックと充電は終わりました」

「そちらはどうです？」

整備班が聞いてくる。

「此方も終了した。しかし、よくこんなOSで……………」

そう彼が言いかけた時、

ビーッ、ビーッ、ビーッ、ビーッ

クルーゼ隊長機帰還。

被弾による損傷ありッ!!

そのアナウンスを聞いた者は驚きを隠せない。

「隊長がッ?!」

「あり得ん…、こんなことが」

消化班 救護班はただちにBデッキへッ!!繰り返す、

(あの隊長が…!?まさかナチュラルに?!)

アスランは先程の少年の顔を思い出す。

(でもアイツなら……)

「そんなッ!!隊長が被弾しただと?!」

銀髪の少年は先程のアナウンスを疑う。

「厄介な機体が残っちまったなあ……」

褐色肌の少年は皮肉的に言う。

この場に居るのは5人。

その内の3人は赤服を着ている。

残りの2人はザフトの軍服ではなく普段着だ。

1人は漆黒の髪と瞳の少年。

もう1人少年は長い髪が顔の半分を覆っていることが特徴的である。髪の高い少年が言う。

「残りの1機が敵にまわったということはラスティは失敗したか……」

「クッ!!傭兵ごときが口を突っ込むな!」

銀髪の少年が食って掛かる。

漆黒の髪の少年は構えながら

「ほう、やるか?」

「止めてくださいッ!!」

それまで黙っていた緑髪の少年が止める。

「いま僕たちが争う必要は無いです。イザーク、それに五飛さんも」「ふんっ!!」

銀髪の少年　　イザークは吐き捨てる様に言うと立ち去る。褐色肌の少年もついていく。

「すみません……」

「気にしてはいないぞ、ニコル」

髪が顔の半分を覆っている少年が言う。

ニコルと呼ばれた少年は

「ですが、五飛さんやトロワさんに当たる必要無かったのに……

……」

「今はそつとしてやれ……」

白亜の戦艦　　アークエンジェルにストライクが着艦する。天使

と悪魔の機体もそれに続く。

ストライクを操作し方膝を折り、両手をゆっくりと降ろす。

手のひらの上にはいた者達は床に足をつける。

「ラミアス大尉ッ!!」

奥から大勢の人が来る。1人の女性が敬礼しながら、
「ご無事でなによりです。それとあの2機は……?」「マリューは言
葉を濁す。

「それは……」

そんなやり取りをしている間に、キラはコックピットから降りる。

キラの姿を見た軍人のひとりが、

「おいおい、まだ子供じゃねえか!?!」

「ラミアス大尉、これは……?」

「……………」

急に背中を叩かれ、後ろを振り返る。

「よっ!?!」

そこにはいつの間にか、コックピットから降りたのか、ヒイロとデュー
オが立っていた。

ヒイロは僕の頭をわしわししながら、

「初めて乗ったにしてはいい出来だったぜ」

そこに、

「へえ〜、コイツは驚いた」

声のする方を向くと、

そこには紫色のパイロットスーツで身を包んだ1人の男が居た…

番外編 その1 (前書き)

過去の物語です

番外編 その1

夢を見る

それは、子供の頃の記憶

アスランと一緒に遊んでいた頃

あれはまだ、僕が6歳の時の

「キラアー！アスラン君が来てくれているわよ」

「ハア！イッ！！」

母さんの声に返事をして、僕は階段を駆け降りる。

「アスランッ！！」

「約束通りに来たぞ、キラ」

「どうする？外で遊ぶ、それとも中でゲームする？」

僕の質問にアスランは

「天気もいいし、外で遊ぶか」

「OK」

僕はサッカーボールを持ち、立ち上がる。

階段を降りながら

「いつものあの公園でいいよね？」

「ああ」

母さんが聞いてくる。

「あら、キラとアスラン君、外で遊ぶの？」

「うん、いつものあの公園で！！」

「そう、気を付けてね」

「ハア！イッ！！」

「分かりました」

「ねえ、アスラン」

僕は彼の名前を呼ぶ。

「なんだキラ？」

「なんでもない！」

アスランが頭を抱える。

「用がないなら呼ぶなよ」

「あはははははっ、ゴメン、ゴメン!!」

「ったく、お前なあゝゝ、……………ん？」

「アスラン、どうしたの?……………あっ!!」

いつも人気の無いこの公園。

だが、今日は先客が居た。ひとり、ブランコに座っている。

「見かけない顔だな……………、ってキラ!？」

隣にいるはずの人物は

「ねえ、何してるの？」

見知らぬ少年に話しかけていた。

少年は顔を上げ、

「母さんを、待ってるんだ……」

「ふくん、あつ」

何か思い付いたようだ。

嫌な予感がする……

「それなら一緒に遊ぼうよッ!」

やっぱり…… (ガクッ)

少年はキョトンツとした顔でキラを見ている。

まあ、それが普通の反応だ。

少年の手を引き、立ち上がらせる。

「僕はキラ、キラ・ヤマト。ヨロシクね あっちは友達の」

仕方なさそうに言う。

「アスラン、アスラン・ザラだ」

それから僕たち3人でサッカーをした。

彼はサッカーをしたことがないと、言っていたけれどすつごく上手で無経験とは思えない。

勿論、ゴールシュートもやった。僕はゴールキーパーをした。

彼がシュートする。

僕は必死にボールに手を伸ばす。

「とっちやあああああッ!」

だが

「おお、入った」

アスランは続けて

「情けないぞお、キラ！」

僕はボールは取れず、土の上に寝転んで居た。

「大丈夫？」

見上げると、彼が心配そうな顔で見ている。

「ヘーキだよ！！」

そう言うと、彼の顔がほころぶ。

とてもキレイで見とれてしまいそうだった。

僕は立ち上がり、服についた土を払う。でも……………

「ヤバイ…落ちない」

あゝあ、帰ったら怒られるな…

「えっ?!」

彼の顔がさらに心配そうになる。

「まつ、いつか」

「どこがだよ…(汗)」

誰かの名前を声がした。

公園の入り口付近に女性が立っていた。

「母さんッ!!」

彼が駆け寄る。

「もう帰っちゃうんだ」

僕は手を振り、

「楽しかったよ、バイバーイッ!!」

彼はこちらを向き、手を振る。

そして、歩き出す。

「あッ!!」

「どうしたんだ、キラ？」

「名前、聞くの忘れた……」

「あ……」

また会えるといいな

ダークブラウンの髪と

プルシアンブルーの瞳を持つ少年に………

番外編 その1（後書き）

FT1巻を読んで書きたくなつた話です。
よかつたら感想を書いていただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7696y/>

ガンダムSEED 交わった世界

2011年12月18日01時49分発行